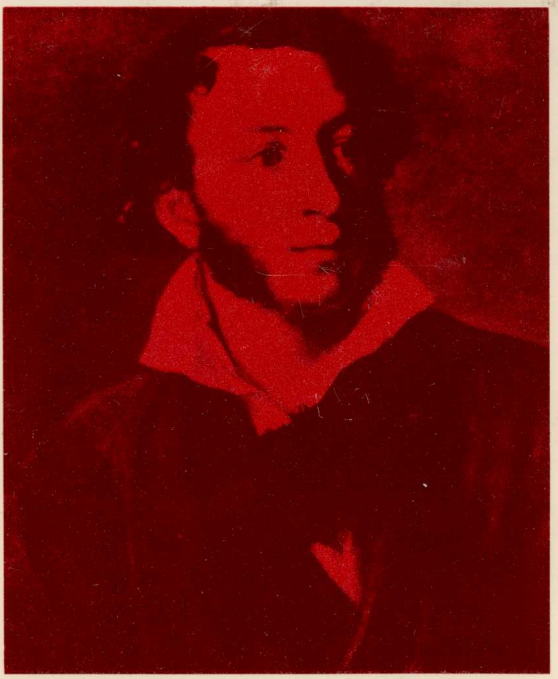
プーシキンとデカブリスト

岩間　徹著



誠文堂新光社

プーシキンとデカブリスト

岩間　徹著

誠文堂新光社

著者<いわま・とおる>紹介
1914年生まれ。
1936年東京帝国大学文学部（西洋史学科）卒
現　職　東京女子大学文理学部教授
専　攻　ロシア史
主要著書（編著を含む）『露国極東政策とウィッテ』（博文館），『ロシア革命とソ連邦』（至文堂），『変革期の社会』（編著：御茶の水書房），『ヨーロッパの栄光』（河出書房新社），『ロシア史〈新版〉』（編著：山川出版社）など。

NDC 238

プーシキンとデカブリスト

一九八一年六月二〇日発行

定価　一八〇〇円

著者　岩間　徹
発行人　小川茂男
発行所　誠文堂新光社
東京都千代田区神田錦町一-五-五
〒101　振替東京7-6294
☎ 03-292-1211
印刷　星野精版印刷株式会社
株式会社大熊整美堂
製本　藤沢製本株式会社

検印省略
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします。

© 1981, Tōru Iwama　Printed in Japan

1023 ——— 3854

誠文堂新光社の雑誌　月刊 芽・子供の科学・初歩のラジオ・無線と実験・電子展望・天文ガイド・農耕と園芸・ガーデンライフ・囲碁・愛犬の友・商店界・アイデア・プレーン

プーシキンとデカブリスト

岩間　徹著

誠文堂新光社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はしがき

プーシキンはロシアの大詩人である。彼をくだらない詩人とおとしめるのは、一八六〇年代のチェルヌイシェフスキーやピーサレフなど、功利主義的文学観を信奉するラジカルな評論家たちとその亜流ぐらいなものだろう。プーシキンほどロシアの国民から敬愛された詩人はあるまい。彼はロシアの国民詩人である。そればかりでない。同時代を生きたゲーテほど世界にその名を知られていないとはいえ、世界の大詩人だと高く評価する人もいる。そうかもしれない。

プーシキンの作品でいちばん有名なのは『エヴゲーニイ・オネーギン』であろう。この作品は全篇八章から成っているが、ほかに詩人が暗号で書いた諸断片、いわゆる「第一〇章」の諸断片がある。この「第一〇章」諸断片にデカブリストたちが登場する。デカブリストというのは、政治的・市民的自由の名において専制政治に真っ向から抗議し、一八二五年一二月一四日、ペテルブルク（いまのレニングラード）の元老院広場（いまのデカブリスト広場）で武装蜂起してあえなく鎮圧された貴族革命家たちで

ある。一二月――ロシア語でデカーブリという――に蜂起したので、この人たちはデカブリストと呼ばれている。

プーシキンとデカブリストは同時代人であるばかりか、同じ世代、同じ階級に属していた。しかもデカブリストのなかにプーシキンの親友もいた。一体、プーシキンはデカブリストの仲間であったのか、それとも仲間でなかったのか、それが本書の主題である。

こんな主題にどんな「現世利益」があるのか、それはわたしの問うところでない。プーシキンやデカブリストが青春を生きた一九世紀の第一・四半期というのは、秘密結社の花盛りの時代で、ロシアも例外でなく、デカブリストの結社が出来た。そういう時代を生きたプーシキンの生きざま自体に、わたしは心ひかれるだけのことで、その生きざまを追求することが、変革に役立つとか、役立たぬとか、そんな「現世利益」の立場はわたしとは無縁である。チェルヌイシェフスキーやピーサレフがプーシキンをおとしめたのは、変革に役立てようとしない詩や小説を否定したからにほかならないが、詩の目的は詩で、それ以外のなにか隠された目的に奉仕させようとするのは邪道だと喝破したプーシキンは「現世利益」に無縁の人であった。

ところで、本書の主題についてあれこれ思案していたとき、わたしはほかならぬ

『エヴゲーニイ・オネーギン』の第一章第四三節に、「血気盛んな連中の仲間には、とうとう、彼ははいらなかった。いや、あの連中をあげつらうのはさし控えよう。わたし自身そのひとりなのだから」という詩句に出会った。「仲間」の解釈はさておき、これは一種の啓示であった。

「仲間」にはいらぬ「仲間」、これだとわたしは合点した。そう合点したものの、綱渡りのようなあやうさが終始つきまとっていた。しかし、プーシキンがデカブリストの「仲間」であったにせよ、なかったにせよ、また「仲間」にはいらぬ「仲間」であったにせよ、彼が詩の目的は詩だと覚悟する詩人であったという事実は、あたかも雪嶺を背景にぴんと張った一条の綱のようにあざやかであった。

プーシキンに詩人以外のなにものかをみようとすることは、そもそもまちがいではあるまいか。チェルヌイシェフスキーやピーサレフが、プーシキンに我慢がならなかったのは、プーシキンに詩人以外のなにものをもみなかったからであって、そのかぎりで彼らは正しかったといえる。プーシキンがもし革命的詩人、詩人的革命家であったら、彼らはあんな非難攻撃をしなかったであろう。

本書を『プーシキン—詩人と革命家の間』として世に出したのは昭和三八年、いま

から一八年前のことである。これをふたたび世に出すにあたって多少手を入れたが、旧版を大きく変えるほどの修正にはならなかった。旧版の所説にたいして同学の士から種々ご批判を頂戴した。たとえば、『青銅の騎士』を「一二月一四日」の象徴化と解釈したのに対して、ご批判をうけたが、事実の正否でなく、解釈の是非の問題なので、あえてもとのままにしておいた。とはいえ、数々のありがたいご批判に十分答えるだけの手入れができなかったのは、学問に大いにきらう「すべて思ひくづをるる」（本居宣長『初山踏』）ことのせいだ。年月長く倦まずおこたらず、はげみつとめなかったせいだ。残念である。

最後に、内外のプーシキン学者の学恩に深く感謝するとともに、本書をふたたび世に出すことをすすめてくれた誠文堂新光社編集部にも記して感謝の意を表する。

昭和五六年四月七日

岩間　徹

目次

はしがき……3

1 おいたち

六〇〇年来の貴族……11
みにくいあひるの子……15
父の書斎……18

2 リツェイの庭

開校式……24
リツェイの友……30
リツェイの壁のそと……34
「詩人」のあけぼの……37

3 ペテルブルク
——青春の彷徨とデカブリスト結社——

バッカスとヴィーナスの饗宴……43

秘密結社〈救済同盟〉……51
秘密結社〈福祉同盟〉……59
「自由」の詩人……69
「仲間」にはいらぬ「仲間」……75
追放……83

4 南ロシアの配所

コーカサス・クリミアの旅……90
キシニョフ……94
木陰多きカーメンカ……100
ミューズの慰め……104
オデッサ……107

5 デカブリスト運動の発展

セミョーノフスキー連隊事件……115
一八二一年のモスクワ会議……121
南方結社と北方結社の成立……127
ニキータ・ムラヴィヨフの憲法……130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『ルスカヤ・プラウダ』……136
両結社統一への努力……142
北方の発展……149
南方の発展……151
ペステリの評価……155

6 ミハイロフスコエ
——デカブリスト反乱の前後——

再会……162
シェークスピアの目……173
一二月一四日……177
不安な日々……185

7 詩人と革命家

絹のくさり……194
デカブリストたちへの思い……203
モスクワ・ペテルブルクの出会い……212
コーカサス旅行……221

コーカサスの出会い……229

8 ボルディノの秋

忽忙から静寂へ――「第一〇章」の執筆――……239
「第一〇章」の資料……246
「第一〇章」のなぞ……255

9 エピローグ……268

年表……281
地図……287
参考文献……x
索引……i

1 おいたち

六〇〇年来の貴族

プーシキンは「六〇〇年来の貴族」の家系を誇っていた。一八二五年の秋のこと、デカブリスト（十二月党）詩人のルイレーエフが、きみは「五〇〇年来の貴族だ」と言って自慢しているが、そんな馬鹿らしいことはやめたまえ、後生だから、プーシキンでいたまえ、と手紙を書いている。プーシキンは、返事のなかで、「五〇〇年来の貴族」ではない、「六〇〇年来の貴族」だ、と訂正している。

プーシキンの誇る「六〇〇年来の貴族」の系譜について詳述するのはやめよう。ただ、ここで詩人が出生についての誇りをつよくもっていたことに注目しておこう。

『わたしの系譜』という詩（一八三〇年）がある。先祖のラトシャから祖父のレフ・アレクサンド

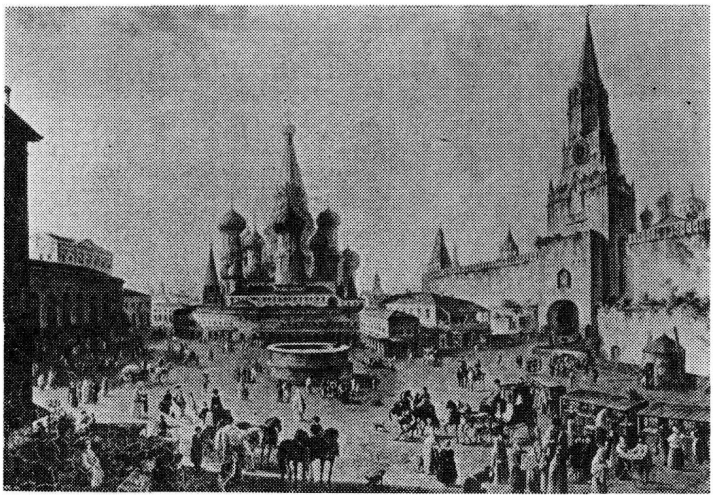
ロヴィチ・プーシキンまでのわが家の歴史を書いたものだ。母方の先祖にはいわゆる「ニグロの血」があった。『プーシキン家とガンニバル家の系譜』（一八三〇年）のなかで、「わたしの母の祖父はニグロで、領主の息子であった」と記している。彼の未完の歴史小説『ピョートル大帝の黒奴』は、この母の祖父ガンニバルをモデルにしたものだ。このいわゆる「ニグロの血」はプーシキンにかなりの心理的影響を与えているようだ。

「六〇〇年来の貴族」という出生への誇りは、ロシアの歴史への愛をはぐくんだ。それは彼の諸作品に反映している。そして、歴史を愛し、歴史を学んだことは、プーシキンに一種の均衡感覚を与えている。彼の精神の振子が革命思想のほうに大きく揺れることがあっても、歴史の知恵による一種のかんで、精神の振子はまたもや均衡を保つというおもむきがあった。歴史の知恵による均衡感覚は「六〇〇年来の貴族」の誇りの重要な副産物だといえよう。

しかしまた、この「六〇〇年来の貴族」という誇りは、貴族社会にたいする感情的・知的反発と奇妙にからみ合っている。プーシキンは「詩人」という天職を自覚していた。当時の貴族社会は、かならずしもこの詩人の自覚を正当に認めなかった。とくに、晩年、ツァーリの宮廷の「囚人」となったプーシキンにとって、「詩人」の価値を評価しない宮廷貴族社会に生きるのはやりきれない気持だった。「六〇〇年来の貴族」という誇りは、「詩人」としての自覚と結びついて、感情的に、また知的に、貴族社会に反発させたのだ。

さて、「六〇〇年来の貴族」の家もプーシキンが生まれたころは、すでに落ちぶれて、名門のほまれこそあれ、はぶりのきかぬ中流貴族だった。プーシキンの父、セルゲイ・リヴォーヴィチは、貴族の子弟が多くそうであるように、軍務につき、イズマイロフスキー近衛連隊に勤め、若い近衛将校としてペテルブルクの社交界で青春をすごした。そのころ、ガンニバル家のナジェージダ・オーシポヴナという美しい女性と結婚した。一七九六年のことだ。この女性がプーシキンの母である。その翌年、姉オリガが生まれ、まもなく一七九八年、父は軍務をしりぞいて、ペテルブルクで暮らすのもものいりだったので、一家をあげて、一七九九年、モスクワへ移った。

プーシキンは『エヴゲーニイ・オネーギン』のなかで、「モスクワ……わがロシア人の心にとって、このひびきには、どんなたくさんの思いがこめられていることか」とうたっている。この白い石の都モスクワは、一八世紀の末にはまだ大きな村のようだった。ところどころに金持の貴族の大きな領地がある。古い教会の円屋根が炎のように金色の十字架をきらめかせてあちこちにみえる。だが、多くはみじめな百姓小屋なみの家である。こんにちのモスクワの繁華街は、当時大きな沼地だった。そしてアヒルやガチョウが道ばたのよどんだ水たまりで泳いでいた。モスクワはきらびやかな豊かさとみじめな貧しさがいっしょになった町だった。ここにはまた古い建築と新しい建築、ヨーロッパふうの慣習と東洋ふうの慣習、無知と教養、文明と野蛮、そういったものが奇妙にからみ合っていた。新しい首都のペテルブルクとはなにかと変わったおもむきをこの古い都はもってい



プーシキンの生まれたモスクワ，赤い広場(エフ・ヤ・アレクセーエフ筆，1801年)

た。ペテルブルクを舞台とすれば、モスクワはその舞台をながめる観客だった。この古い町には退職した将軍や官吏がじつに多い。そして官界のひきを求めたり、金持の花嫁をさがしたり、あるいは母なるモスクワのいろんな気散じをたのしむために、田舎から地主たちもやってきた。

このなかば東洋ふうの、またなかばヨーロッパふうの町に、プーシキン家もペテルブルクをひきはらってやってきた。モスクワでこの若い夫婦は〝ドイツ街〟に居をかまえた。当時〝ドイツ街〟はモスクワの上流社会が住む邸町だったのである。本書の主人公が生まれたのは、この〝ドイツ街〟の家であった。一七九九年五月二六日、ロシア最大の詩人アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキンは、この家で呱々の声をあげた。その日は神聖木曜日で、教会の鐘の音が一日中鳴りひ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com